酪農試験場だより

No. 37

放牧風景

内容紹介

1. 放牧の季節が近づきました！
2. エサ作りの季節となりました
3. 受精卵移植の連載について（予告）

酪農の生産性向上には
——よい牛・よいえさ・よい給与——
放牧の季節が近づきました！！

酪農家のみなさん、放牧（山エゲ）の季節になりました。入数の準備は整いましたか？放牧育成効果をより一層高めるためには、入数前の管理（放牧前剪毛など）が非常に重要です。

育成牛を放牧する場合には、放牧環境（気候、飼料、社会、衛生環境など）にスムーズに適応し、放牧初期の発育停滞、疾病による損害を未然に防止するためには、放牧前剪毛は十分に行う必要があります。特に含飼いされていた牛は、十分な期間をかけて行うことが大切です。

すなわち、放牧予定牛は早期から屋外に出し、入数2週間前から屋夜ベッド等で放し飼いし、気候の変化に慣らすとともに群としての行動を身につけさせます。また、早くから青草を給与し、第1胃の剪毛を行い、入数2週間前には青草のみの飼養に切り替えます（図1）。放牧前剪毛期間は少なくとも1ヵ月間は必要です。

育成牛の放牧は6ヵ月齢以上から可能ですが、この時期までに粗飼料主体となるような飼養管理をし、ルーメンの機能を作り上げましょう。

角のある牛は、人間や他の牛に対して危険ですので、除角するようにしましょう。剪毛についても、放牧時は運動量が多いので蹄が剥げる危険性があります。特に含飼いされていた牛は、蹄が伸ばしていますので剪毛を行いましょう。また入数前には、発育状態をチェックして放牧する牛を決め、さらに衛生検査を実施し、疾病等があれば完全に治療してから放牧しましょう。

育成牛の公共牧場への放牧は、子牛を集団的、効率的に飼育するうえで最も望ましい飼養形態ですので、以上述べた入数前の管理を十分に行い、山エゲするよう心掛けしてください。
エサ作りの季節となりました

日本は、サイレージの国であると言われています。それは、酪農のきかんな北アメリカ、西ヨーロッパと比べて、気候が湿潤なために乾草よりサイレージの調製に適しているからです。日本において乾草生産のきかんな地方は北海道ですが、最近はその北海道だけでなく、乾草が減ってサイレージが増加しています。それは、北海道においても、なかなか良質の乾草が作れないという事情ながらそうです。

私が栃木県においても、当然のことながらサイレージが自給飼料の主力になっています。トウモロコシ・ソルガムの夏作やイタリアン・麦の冬作による通年サイレージがその基本です。しかし、これらの作物に対する農家の栽培技術・調製技術には、思いのほか大きな違いがあるのです。下表に、府県における単収分布の表を載せましたが、農家間にある大きな収量差のあることがわかると思います。例えば、トウモロコシ（畑）の場合、収穫6t以上の農家が30％であるのに対し、4t以下の農家は28％もあるのです。これは、播種時期や除草剤散布時期の遅れ、不適当な施肥、そして、収穫時期が早過ぎたり、遅過ぎたりといった基本的な技術の違いが、このような収量差をもたらしたものだと思うます。「基本的技術を大切にする」ことを、今年のエサ作りを始める前に、肝に銘じて頂きたいと思います。経営良好な酪農家のみなさんは基本的技術を確実に実行しています。

トウモロコシの県種品種
極早生NS105・P3732
早生X L61・P3352
NS 68
中晩生 P3160

| 年輪 | 区分 | 1-2 | 2-3 | 4-5 | 6-8 | 8以上 | 平均収量
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>育成</td>
<td>モロコシ</td>
<td>7</td>
<td>14</td>
<td>29</td>
<td>24</td>
<td>23</td>
<td>13.3t</td>
</tr>
<tr>
<td>育成</td>
<td>サイクルス</td>
<td>9</td>
<td>24</td>
<td>33</td>
<td>21</td>
<td>13</td>
<td>5.1t</td>
</tr>
<tr>
<td>植え</td>
<td>水田</td>
<td>28</td>
<td>38</td>
<td>28</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>3.5t</td>
</tr>
<tr>
<td>植え</td>
<td>水田</td>
<td>13</td>
<td>37</td>
<td>33</td>
<td>13</td>
<td>4</td>
<td>4.2t</td>
</tr>
<tr>
<td>平均</td>
<td></td>
<td>13</td>
<td>28</td>
<td>35</td>
<td>17</td>
<td>7</td>
<td>4.5t</td>
</tr>
</tbody>
</table>
受精卵移植の連載について（予告）

これまでにも、受精卵移植（E・T）について、酷試だより何回か書いてきましたが、これらはE・Tによる成果の紹介が主でした。今年の1月からは栃農連のE・T車の稼働を開始したので、野外でのE・Tの普及もスピードアップするとと思われます。しかし、初めてE・Tをやろうとする場合には不安や心配はつきものです。そこで、具体的に採卵から移植まで行うときにどのようなことに注意してやれば良いかということを中心に、5回シリーズで連載したいと思います。

実際に何ヶ月くらいの受精卵が取れるのか、そしてその受精卵を移植してどのくらいの受胎率が得られるのか、特に気になるところだと思います。まず1回目は平成元年度のE・T成績について紹介したいと思います。2回目は良い受精卵をたくさん取るためにはどの様な牛を選ぶかということについて、3回目はその受精卵を移植して高い受胎率を得るためにはどの様な受卵牛を選んだら良いかということを書きたいと思います。4回目はちょっと専門的になりますが、人工授精の時と違い、移植の時に注意しなければならないことがありますから、そのことについて書き、最終回はE・Tによりせっかく受胎したのに、分娩時に死亡したり、哺乳中に下痢をしたりして死んでしまってはそれまでの苦労が何にもなりませんから、これらの事例防止について書きたいと思いますので、これから受精卵移植の連載にご期待ください。

受精卵移植の連載の内容
1　平成元年度のE・T成績について
2　供卵牛の選定について
3　受卵牛の選定について
4　移植時の注意点について
5　E・T産子の分娩時及び哺乳中の事故防止について

栃木県酢農試験場
〒329-27 須賀部町松本保298
平成2年3月13日
電話 0287-36-0230